

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
令和4年度 委託業務実績報告書

プログラム名：学術知共創プログラム
研究テーマ名：人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う
実施機関：国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学

1. 業務の実施日程

研究項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 理論 (全期間を通して、資料収集、学会発表、論文執筆)					キック・オフ・ミーティング			人文知共創センター設立 理論班拡張会議	「ロボットと感情」ワークショップ		公開セミナー	公開ワークショップ 全体集会 論集刊行記念シンポジウム センター設立記念シンポジウム
② 自然と人間の相互関係史 (全期間を通して、文献研究、論文執筆、学会パネル企画)											学会シンポジウム 班別会議	
③ セクシュアリティの多様性 (全期間を通して、学会発表、調査、論文執筆、海外の研究協力者との共同研究)											班別会議	

2. 業務実績の説明

・全体の総括

〈メンバーの拡充と実証性の強化〉

「審査に係る所見」では、「本研究では社会科学に深く関わるテーマを扱うため、政治学、経済学、社会学等の専門家の参加が望まれる」とあったため、直ちに関連の分野で、問題意識を同じくする研究者をリサーチし、連絡を取り、プロジェクトの趣旨を説明した上で、参加を依頼し、快諾を得た。また、同じく審査所見には、「実証という観点から見直し、焦点を絞り込むことも検討する余地がある」と記されていたため、シミュレーションなどにより理論を検証する複雑系の研究者にも参加を依頼し、快諾を得た。これにより、社会の実相を考察するという観点からは、元々のメンバーであった社会思想史、政治思想史、社会史（以上、第2班「自然と人間の相互関係史」、社会情報学（理論班）の研究者に加え、政治学の研究者（理論班）が加わり、また実証という点からは、実験系（6名）、調査系（3名）に加え、複雑系科学の研究者（理論班）も研究分担者としてプロジェクトに加わることとなった。

〈キック・オフ・ミーティング(2022. 8. 11-12)〉

2022年5月25日、採択通知を受けて即刻、キック・オフ・ミーティングを開催するための準備に入った。メンバー全員が参加できるように日程調整を重ね、8月11-12日にキック・オフ・ミーティングを名古屋大学で開催した。これには、メンバー全員が参加（ほぼ全員が対面参加、一部海外出張者らがオンライン参加）し、あらためてプロジェクトの目指すところとアプローチ方法、各班の行

程や班ごとの連携の企画について、二日間にわたり話し合い、確認し、議論した。

〈研究拠点：人文知共創センター設立〉

採択決定後、速やかに、名古屋大学人文学研究科執行部、ならびに名古屋大学本部と交渉を重ね、本プロジェクトを推進するための研究拠点として、人文知共創センターを設置するための準備を進めた。これにより、名古屋大学の人文学研究科教授会、名古屋大学運営委員会、評議会での承認を得て、2022年11月1日に、人文学研究科附属人文知共創センターが設置された。

当センターは、プロジェクト代表である中村をセンター長とし、プロジェクトメンバー全てがセンターの構成員として加わった。本プロジェクトは、人間と自然、他者との関係を見直すための理論的足がかりとしてラトウールのアクターネットワーク理論を根底に据えていることを踏まえ、人間とロボットとの関係を実験研究により考察する、ヒューマンエージェントインタラクションを考察する研究者も加わり、総計22名により構成された。

〈プロジェクト運営のための体制整備：事務補佐員の雇用とセンター助教の公募〉

センターが設立されたことに伴い、人文学研究科からは助教ポストを付与されたため、プロジェクトの運営を推進し、かつ、研究面でも補完出来る人材を公募し、人選を進めた。これにより、プロジェクトメンバーらが抱える会計処理などの事務作業や、運営のために必須となる業務が大幅に軽減されることとなった。また、オンライン型連絡板を設置し、プロジェクト全体で常時意見交換・情報交換を行う態勢を整え、これにより、班を問わず、多くの企画が提案され、実現した。

〈広報：プロジェクトのHPとセンターのHPの立ち上げ〉

プロジェクト始動に伴い、プロジェクトのHPを立ち上げ、プロジェクトの趣旨や目的、研究組織などを広報した。これ以降のプロジェクト全体の活動は、プロジェクトのHPにより、随時広報している。さらに11月に人文知共創センターが設立されたことにより、名古屋大学大学院人文学研究科附属人文知共創センターのHPも立ち上げた。これにより、新聞社からの取材を受け、当該新聞社の記事として掲載された。

〈班活動の始動と班を超えた連携、全体集会の定例化〉

8月初旬に第5班の班別会議が先陣を切って開催され、キック・オフ・ミーティングを経て、11月には理論班を主として、理論班以外のメンバーも参加する形で拡張会議を開催し、今後の研究上の方向性を議論した。また、グループリダーらによるGLミーティングを行い、各班の活動状況や今後の方針などについて、互いに報告し合った。これを受け、2022年12月にはロボット視察研究会が企画され、各班から、人文系、自然科学系の研究者らが参加し、それぞれの見地から研究報告を行う討論会が開催された。2023年2月から3月にかけては、各班が中心になって企画したセミナーやワークショップが開催され、これらには、班を問わずメンバーらが参加し、多方面から問題提起をし、議論した。年度末の3月には、キック・オフ・ミーティングに続き、第2回の全体研究集会を対面で開催し、半年間の研究活動を互いに紹介し合い、論じ合いつつ、今後の方向性をさらに検討した。

〈公開シンポジウム：人文知共創センター設立記念と論集刊行記念のシンポジウムの開催〉

本プロジェクトの前身となる、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業のプロジェクト（研究代表：大平英樹）のメンバーが中心となり、本プロジェクトのメンバーも加わって準備を進めてきた論集を2022年11月末に刊行したことをうけ、2023年3月には、『予測と創発』論集刊行記念シンポジウム、ならびに、人文知共創センター設立記念シンポジウムを、一般に向けて公開し手開催し、プロジェクトの趣旨と意義を広く発信した。

以下に、各班を中心としたプロジェクト活動を記す。

①理論

8月11・12日のキックオフ・ミーティングでは、初日に各自の研究の基盤となる方法論、概念を紹介し、2日目には、午前の部は理論班による基調報告とし（担当：平田、金、大平（徹）、田村）、分野ごとに異なる概念・手法などを整理し、他班との手法的・理論的連携を探った。11月には理論班拡張会議を開催し、理論班のメンバー、グループリーダーを中心として班を超えて、プロジェクト全体の枠組みとなりうる理論について議論を重ねた。特にアクターネットワーク理論を軸とした「ブリュノ・ラトゥールによるテレストリアル概念の提唱とその批判的含意について」（担当：金）、SPSモデルの多面的展開を中心とした「社会集団の生成と崩壊に関するモデル・実験アプローチ」（担当：鈴木）、さらに「人新世における民主主義の課題は何か？」（担当：田村）を基調報告として、その後参加者らで活発に議論を行った。12月15日には、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業委員会主催のシンポジウムで活動報告を行うと共に、パネルディスカッション「未来社会を見据えた人文学・社会科学分野における学術知共創の課題について」では「未来の人文学」と題して報告を行った（担当：中村）。3月28日の全体集会では、理論班からは、中村と大平健太・大平徹が活動報告を行った。翌29日のシンポジウムでは、午前の部で大平徹、平田が報告し、午後の部では鈴木、田村が報告した。シンポジウム終了後の懇談会では、ChatGPTなどの問題も含め、人文知共創の可能性について意見交換を行った。

②自然と人間の相互関係史

8月の全体会議では、自然と人間の問題を扱うにあたり、まず人間とは何かという問題を論じる必要があるという理解に至った。それにもとづき、古代から現代の人間観についてふたつのアプローチから研究を進めた。ひとつは、2023年3月1日の班別会議で班員の立花により行われた、アリストテレスの人間観に関する研究発表を中心とする。ここでは「徳」「幸福」という概念が重要な役割を果たし、人間性の問題を、倫理的見地を含めて論じるという本班の目標に向けて大きな歩み出しができた。もうひとつは2023年3月11日にヒトと動物の関係学会で行ったシンポジウム「どこまでが動物なのか—人文学から考える」（企画：伊東、報告：岩崎、高橋（以上第2班）、池野（第5班）、コメンテーター：南谷（第3班））であり、人間性について、動植物との対照を通して多面的に論じた。これらの成果にもとづき、年度末の全体会議において、次年度は人間性を社会的・集団的・組織的な観点から論じてみるという計画を立てるに至った。

③セクシュアリティの多様性

令和4年度は、西欧近代の諸制度によって形成されてきた「ハビトゥスとしてのジェンダー」を、言語・文学・精神分析・進化心理学・生物学の観点から批判的に検討する作業に着手した。まずは各班員が関連文献の収集や調査・実験に必要な準備を進め、2023年3月19日、京都大学において班別研究会を催し（理論班、第5班からもメンバーが参加）、各班員がそれぞれ研究の進捗状況を発表し、知見の共有と討議をおこなった。班別研究会では特に、フランス詩における脚韻の性（言語的ジェンダー）と作家のセクシュアリティの関わり（鳥山）、「コラージュ・フェミニスト」と呼ばれる現代フランスにおける社会運動（ボーヴィウ）、フロイトの両性性論やクリストフ・ドゥジュールの「二つの身体」論（立木）、進化心理学における性、性的マイノリティ・非典型的性分化とサヴァン傾向の関連（坂口）といった問題をめぐって討議した。また令和5年度の

予定として、2023年5月にフランスから研究者を招いてワークショップを開催すること、また第3班と共同してテキストマイニング講習会をおこなうことを決めた。

【研究成果の発表状況等】（責任機関（研究代表者）のみ記載）

○論文（計43件）うち査読付論文 計34件、うち国際共著論文 計3件、うちオープンアクセス 計21件

1. Elhamer, Z., Suzuki, R., Arita, T. (2023). An IoT-based experimental framework for studying continuous social dynamics in a Game-Theoretical and Face-to-Face situation with human participants, *Psychologia*. 掲載決定, 査読有
2. Hashikawa, R., Takahashi, H., Yanase, Y. (2023). The unknown world of my stuffed animal: Effects of the presentation of social networks in virtual space on the social presence of stuffed animals, *Psychologia*. 掲載決定, 査読有
3. Ikeda, S., Kawata, M., Takahashi, H. (2023). Do infants predict reward distribution to robots, *Psychologia*. 掲載決定, 査読有
4. Nakamura, Y. (2023). Time is an invention by human beings. What about memory? Freud's "Project for a Scientific Psychology" today, *Psychologia*. 掲載決定, 査読有
5. Nishimoto, K., Suzuki, R., Arita, T. (2023). Social particle swarm model for investigating the complex dynamics of social relationships, *Psychologia*. 掲載決定, 査読有
6. Ohira, H. (2023). Predictive processing and emergence of human mind, *Psychologia*. 掲載決定, 査読有
7. Sakuma, H., Takahashi, H., Ogawa, K. (2023). Ishiguro, H. Immersive role-playing with avatars leads to adoption of others' personalities. *Frontiers in Virtual Reality*, 4(6). <https://doi.org/10.3389/frvir.2023.1025526>. 査読有, オープンアクセス
8. Sugaya, N., Yamamoto, T., Suzuki, N., Uchiumi, C. (2023). Change in alcohol use during the prolonged COVID-19 pandemic and its psychosocial factors: A one-year longitudinal study in Japan, *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 20(5), 3871. <https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36900880/>. 査読有, オープンアクセス
9. Takai, S., Hasegawa, A., Shigematsu, J., Yamamoto, T. (2023). Do people who highly value happiness tend to ruminate?, *Current Psychology*, <https://doi.org/10.1007/s12144-022-04131-6>. 査読有, オープンアクセス
10. Toriyama, T. (2023). Expectation and surprise in valéry's poetry, *Psychologia*. 掲載決定, 査読有
11. Yamamoto, T., Nakamura, Y., Ohira, H., Jin, M. (2023). Quantitative analysis of the characteristics and historical transition of Edogawa Rampo's works, *Psychologia*. 掲載決定, 査読有
12. Yamashita, Y., Yamamoto, T. (2022). Virtual reality heals my reality: The effect of virtual reality self-counseling with the intimate other avatar, *PsyArXiv*, <https://psyarxiv.com/fcda8/>.
13. Yamamoto, T., Uchiumi, C., Suzuki, N., Sugaya, N., Murillo-Rodriguez, E., Machado, S.,

- Imperator, C., Budde, H. (2022). Mental health and social isolation under repeated mild lockdowns in Japan, *Scientific Reports*, 12(8452), 1-11. <https://doi.org/10.1038/s41598-022-12420-0>. 査読有, オープンアクセス
14. Hasegawa, A., Oura, S., Yamamoto, T., Kunisato, Y., Fukui, Y. (2022). Preliminary validation of the self-report measure assessing experiences of negative independent and dependent event frequency in Japanese university students, *Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy*, 1-23. 査読有, オープンアクセス
 15. Imamura, C., Sakakibara, K., Arai, K., Ohira, H., Yamaguchi, Y., Yamada, H. (2022). Effect of indoor forest bathing on reducing feelings of fatigue using cerebral activity as an indicator, *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 19(11), 6672. <https://doi.org/10.3390/ijerph19116672>. 査読有, オープンアクセス
 16. Kanakogi, Y., Miyazaki, M., Takahashi, H., Yamamoto, H., Kobayashi, T., Hiraki, K. (2022). Third-party punishment by preverbal infants. *Nature Human Behaviour*, 6(9), 1234-1242 <https://doi.org/10.1038/s41562-022-01354-2>. 査読有, オープンアクセス
 17. Machado, S., Teixeira, D., Monteiro, D., Imperatori, C., Murillo-Rodriguez, E., Pereira da Silva Rocha, F., Yamamoto, T., Amatriain-Fernández, S., Budde, H., Carta, M.C., Caixeta, L., Souza de, A., Sá Filho (2022). Clinical applications of exercise in Parkinson's disease: what we need to know?, *Expert Review of Neurotherapeutics*, 22(9), 771 - 780. <https://doi.org/10.1080/14737175.2022.2128768>. 査読有
 18. Massullo, C., Bersani, F.S., Carbone, G.A., Panno, A., Farina, B., Murillo-Rodríguez, E., Yamamoto, T., Machado, S., Budde, H., Imperatori, C. (2022). Decreased resting state inter- and intra-network functional connectivity is associated with perceived stress in a sample of university students: an eLORETA study, *Neuropsychobiology*, 81(4), 286-295. <https://doi.org/10.1159/000521565>. 査読有
 19. Miyazawa, K., Kyuragi, Y., Nagai, T. (2022). Simple and effective multimodal learning based on pre-trained transformer models, *IEEE Access*, 10, 29821-29833. <https://doi.org/10.1109/access.2022.3159346>. 査読有, オープンアクセス
 20. Ramella-Zampa, B., Carbone, G.A., Panno, A., Santos, M., Imperatori, C., Budde, H., Murillo-Rodriguez, E., Yamamoto, T., Machado, S. (2022). Understanding and conceptualizing eSports among behavioural addictions: a brief overview of the literature, *Emerging Trends in Drugs, Addictions, and Health*, 2(100048), 1-9. <https://doi.org/10.1016/j.etdah.2022.100048>. 査読有, オープンアクセス
 21. Ohira, T. (2022). On a simple dynamical map with a flooring function, In *Proceedings of 41th JSST Annual International Conference on Simulation Technology*, Aug.31-Sep.2, 298-300. <https://doi.org/10.51094/jxiv.120>. 査読有, オープンアクセス
 22. Ohira, K., Ohira, T. (2022). Delayed dynamics with transient oscillations, *Journal of Physical Society of Japan*. <https://doi.org/10.7566/JPSJ.92.064002>. 査読有
 23. Suga, A., Naruto, Y., Maulina, V.V.R., Uruguchi, M., Ozaki, Y., Ohira, H. (2022). Mothers' interoceptive sensibility mediates affective interaction between mother and infant, *Scientific Reports*, 12(1), 10850. <https://doi.org/10.1038/s41598-022-71441-1>. 査読有, 国際共

著, オープンアクセス

24. Tamura, K., Kobayashi, Y., Ohira, H. (2022). Interoceptive accuracy did not affect moral decision-making, but affect regret rating for one's moral choices, *Frontiers in Psychology*, 12, 746897. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.746897>. 査読有, オープンアクセス
25. Taniguchi, T., Yamakawa, H., Nagai, T., Doya, K., Sakagami, M., Suzuki, M., Nakamura, T., Taniguchi, A. (2022). A whole brain probabilistic generative model: Toward realizing cognitive architectures for developmental robots, *Neural Networks*, 150, 293-312. <https://doi.org/10.1016/j.neunet.2022.02.026>. 査読有, オープンアクセス
26. Tomyta, K., Katahira, K., Ohira, H. (2022). Effects of interoceptive accuracy on timing control in the synchronization tapping task, *Frontiers in Neuroscience*, 16. <https://doi.org/10.3389/fnins.2022.793461>. 査読有, オープンアクセス
27. Ueno, D., Ohira, H., Narumoto, J. (2022). Interoception and the autonomic nervous system: Investigating affect, decision-making, and mental health, *Frontiers in Neuroscience*, 16, 646240. <https://doi.org/10.3389/fnins.2022.646240>. 査読有, オープンアクセス
28. Uruguchi, M., Maulina, V.V.R., Ohira, H. (2022). Interoceptive accuracy correlates with precision of time perception in the millisecond range, *Frontiers in Neuroscience*, 16(3). <https://doi.org/10.3389/fnins.2022.846583>. 査読有, 国際共著, オープンアクセス
29. Maulina, V.V.R., Yogo, M., Ohira, H. (2022). Somatic symptoms: Association among affective state, subjective body perception, and spiritual belief in Japan and Indonesia, *Frontiers in Psychology*, 13. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2022.829183>. 査読有, 国際共著, オープンアクセス
30. 和泉悠 (2023). ヴァーチャル劣位化としての悪口, 倫理学年報, 第72集, 日本倫理学会, 3月, 印刷中. 査読有, オープンアクセス
31. 和泉悠 (2023). 言語哲学におけるいくつかのトレンド, 現代思想, 51 (1), 青土社, 188-195, 1月.
32. 山本哲也, 山下裕子 (2023). バーチャルリアリティの臨床応用: 仮想現実とアバターを活用したメンタルヘルスケア, 産業ストレス研究, 30(2). In press, 査読有
33. 大平徹 (2022). ノイズと遅れの相互作用: 遅れフォッカー・プランク方程式と遅れ切替えによる漸近安定性の拡張, 京都大学数理解析研究所 (RIMS) 講究録No. 2232, 時間遅れ系と数理解析: 理論と応用の新たな展開に向けて (代表: 中田行彦), 83-93.
34. 鈴木麗璽 (2022). 私のブックマーク: 学習・コミュニケーション・言語の創発と進化に対する構成論的アプローチ, 人工知能学会誌, 37 (5), 661-671.
35. 伊東剛史 (2022). (書評) Helen Louise Cowie, *Victims of Fashion: Animal Commodities in Victorian Britain*, ヴィクトリア朝文化研究, 20, 164-168.
36. 森元斎 (2022). after the requiem ジャン＝リュック・ゴダールの脱構成, ユリイカ, 55(2), 542-551.
37. 森元斎 (2022). 森崎民俗学序説 森崎和江における「水のゾミア」の思想, 現代思想, 50(13), 230-242.
38. 和泉悠 (2022). 「知らんけど」の言語哲学, ユリイカ, 54 (10), 青土社, 209-213, 8月.
39. 境辰也, 堀井隆斗, 長井隆行 (2022). Graph2vecを用いた世界モデルの分散表現獲得と他者

- 世界モデルの推定, 日本ロボット学会誌, 40(2), 166-169. 査読有, オープンアクセス
40. 原田悠斗, 青木達哉, 堀井隆斗, 長井隆行 (2022). ホームロボットによる物体姿勢推定のための仮想空間での推論に基づく視点計画, 日本ロボット学会誌, 40(4), 335-338. 査読有, オープンアクセス
 41. 浅香智輝, 堀井隆斗, 長井隆行 (2022). 主観および客観視点でロボットを操作できる VR 模倣学習支援システムの提案, 日本ロボット学会誌, 40(8), 721-724. 査読有, オープンアクセス
 42. 横光健吾, 高階光梨, 山本哲也 (2022). 遠隔心理支援における認知行動療法実践の基礎と課題, 認知行動療法研究, 48 (2) , 135-144. 査読有
 43. 多和田真太郎, 坂口菊恵, 齋藤慈子 (2022). クラインフェルター症候群における認知特性・性別違和・ホルモン治療の選択肢について, GID学会雑誌, 15(1), 119-132. 査読有

○著作物 (計16件)

1. 『Sit Down, Sit Down Please, Sphinx. 泉太郎』東京オペラシティ文化財団, 2023年3月, 総ページ数未定 (分担執筆: 武田宙也「幽霊を保存し続けること」ページ数未定)
2. 近藤保彦ら編『脳とホルモンの行動学—わかりやすい行動神経内分泌学 (第2版)』西村書店, 2023年3月, 364頁 (分担執筆: 坂口菊恵「人間の性行動における生物学的基盤」11頁)
3. 『認知科学講座4 心をとらえるフレームワークの展開』東京大学出版会, 2022年9月, 272頁 (分担執筆: 大平英樹「第3章 内受容感覚の予測的处理」38頁)
4. 大平英樹 (監修・解説) 『我感ずる、ゆえに我あり』青灯社, 2022年6月, 756頁.
5. 中村靖子編『予測と創発—理知と感情の人文学』春風社, 2022年3月, 503頁.
6. 中村靖子編『予測と創発—理知と感情の人文学』春風社, 2022年3月, 503頁 (分担執筆: 岩崎陽一「第2章 因果応報と運命—予測が意味をなさない世界における行為規範」34頁)
7. 中村靖子編『予測と創発—理知と感情の人文学』春風社, 2022年3月, 503頁 (分担執筆: 平田周「第4章 尋問、モラル・エコノミー、罰の不公平な配分—ディディエ・ファッサンによる国家の抑圧装置に関する研究を手がかりに」45頁)
8. 中村靖子編『予測と創発—理知と感情の人文学』春風社, 2022年3月, 503頁 (分担執筆: 鳥山定嗣「第5章 予期と驚き—ヴァレリーの考察と詩作」51頁)
9. 中村靖子編『予測と創発—理知と感情の人文学』春風社, 2022年3月, 503頁 (分担執筆: 池野絢子「第6章 失われた芸術作品の再構築—クルト・シュヴィッターズの《メルツバウ》をめぐって」251-282頁)
10. 中村靖子編『予測と創発—理知と感情の人文学』春風社, 2022年3月, 503頁 (分担執筆: 大平徹「第7章 予測と遅れ: 過去からの逆襲」45頁)
11. 中村靖子編『予測と創発—理知と感情の人文学』春風社, 2022年3月, 503頁 (分担執筆: 伊東剛史「第8章 新種発見の感情史: 「鳥学共同体」における栄誉と名誉」37頁)
12. 中村靖子編『予測と創発—理知と感情の人文学』春風社, 2022年3月, 503頁 (分担執筆: 山本哲也「第10章 私を理解し表現する人工知能」29頁)
13. 中村靖子編『予測と創発—理知と感情の人文学』春風社, 2022年3月, 503頁 (分担執筆: 大平英樹「第11章 予測により創発される心性」52頁)
14. 森元斎著『女、命、自由: クルドのロジャヴァ革命について』、『アナキズム』37, 2023年3月.

15. 十川幸司・藤山直樹編, 立木康介他著『精神分析のゆくえ』金剛出版, 2022年11月, 256頁.
16. 高橋英之著『人に優しいロボットのデザイン「なんもしない」の心の科学』福村出版, 2022年9月, 216頁.

○講演 (計57件) うち招待講演 計24件、うち国際学会 計9件

1. Shimamoto, R., Suzuki, R., Arita, T. (2023). Facilitating co-creative communication in proximity voice chat by artificial agents: Preliminary investigation based on a collective word guessing task, 28th International Symposium on Artificial Life and Robotics, B-Con PLAZA, Beppu, Japan, Jan. 24-26.
2. Ohira, T. (2023). Diverse behaviors from a simple dynamical map with the flooring function, 8th International Symposium on BioComplexity (ISBC8), Beppu, Jan. 25-27.
3. Ohira, H. (2023). Predictive processing of interoception as a base of mentality: Implications for morality, International Meeting on Robo-Ethics and Philosophy between Italy and Japan, Milano, Como, and Bergamo, 8-10 Mar.
4. Ohira, T. (2022). On a simple dynamical map with a flooring function, 41st JSST International Conference on Simulation Technology, Online (Kyoto), Aug. 31-Sep. 2.
5. Ohira, T. (2022). A simple dynamical map with a flooring function, Roles of Heterogeneity in Nonequilibrium Collective Dynamics 2022, Tokyo University, Sep.16-17.
6. Tsuiki, K. (2022). Division du sujet, Foucault/Lacan, Journées d'études du Pari de Lacan : En finir avec la psychanalyse ?, 11 et 12 juin 2022, 250 personnes en total ont assisté en présentielle (à Paris) et en ligne pour les deux journées. 招待講演
7. Ohira, H. (2022). Emergence of emotion and decision-making based on predictive processing of interoception: Implications for emotional intelligence, International Conference on Emotional Intelligence 2022, Palermo, Italy, 30 Aug. – 2 Sep. 招待講演
8. Ohira, H. (2022). Affective decision-making based on interoceptive predictive processing: Implications for clinical issues, NTTR Webinar (online), 20 Apr. 招待講演
9. Takahashi, H. (2022). Interaction with a friendly autonomous agent strengthens human “self”, Joint Conference on Language Evolution, Kanazawa, Sep. 5-8.
10. Tian, J., Hieida, C., Yoshimoto, J., Kimura, K., Ohira, H., Ikeda, K. (2022). A study for the exploration-exploitation strategy of human based on restless two-armed bandit task. 情報処理学会第84回全国大会, 愛媛大学城北キャンパス, 3月3日-5日.
11. 大平徹 (2023). 遅れと予測: 過去からの逆襲, 「予測と創発: 理知と感情の人文学」刊行記念シンポジウム, 名古屋大学東山キャンパス, 3月29日.
12. 鈴木麗璽(2023). エージェント化する社会: 構成論的アプローチで探る人付き合いのダイナミクス, 『予想と創発: 理知と感情の人文学』刊行記念シンポジウム, 名古屋大学東山キャンパス, 3月29日. 招待講演
13. 平田周(2023). 尋問、モラル・エコノミー、罰の不公平な配分—ディディエ・ファッサンによる国家の抑圧装置に関する研究を手がかりに, 『予想と創発: 理知と感情の人文学』刊行記念シンポジウム, 名古屋大学東山キャンパス, 3月29日. 招待講演
14. 山本哲也 (2023). AI・ICTを活用した行動科学と社会実装, 行動科学学会第38回ウィンター

カンファレンス2023, 3月18日. 招待講演

15. 山本哲也 (2023). ウェルビーイングの向上に寄与する人工知能技術と情報通信技術の活用, SOMPOインスティテュート・プラス 未来アカデミー, 3月9日. 招待講演
16. 山本哲也 (2023). デジタルマインドフルネス ―瞑想の実践を支援するテクノロジーの活用―, 日本マインドフルネス学会第9回大会 シンポジウムII「脳の変化からマインドフルネスを理解する」, 3月5日. 招待講演
17. 岩崎陽一 (2023). 無言のオウム、饒舌な蛇―動物たちが喋り出す古代インドの物語世界, シンポジウム「どこまでが動物なのか? : 人文学から考える」ヒトと動物の関係学会第29回学術大会, 東洋大学白山キャンパス, 3月11日. 招待講演.
18. 岩崎陽一 (2023). 古代インドの学知体系と価値創造, 名古屋大学人文学研究科附属人文知共創センター設立記念シンポジウム「けさひらく人文学」, 3月29日. 招待講演
19. 田村哲樹(2023). 『民主主義の徹底化』か? ―無意識(データ)とノンヒューマンをめぐって, 名古屋大学人文学研究科附属人文知共創センター設立記念シンポジウム〈けさひらく人文知〉, 名古屋大学東山キャンパス, 3月29日. 招待講演
20. 伊東剛史(2023). 引き裂き、引き裂かれるダーウィーン―動物生体解剖と植物の神経, シンポジウム「どこまでが動物なのか: 人文学から考える」ヒトと動物の関係学会, 東洋大学, 3月11日.
21. 伊東剛史(2023). 新種発見の感情史: 「鳥学共同体」における栄誉と名誉, 『予想と創発: 理知と感情の人文学』刊行記念シンポジウム, 名古屋大学東山キャンパス, 3月29日. 招待講演
22. 森元斎, 富田克也, 相澤虎之助他 (2023). 「21世紀の映画と社会」座談会, 「21世紀の映画と社会」, 長崎大学, 3月21日ー22日.
23. 森元斎, 酒井隆史 (2023). ライブトーク『グレーバーとは誰か?』, 『価値論』(D・グレーバー著・以文社)刊行記念, 誠品生活日本橋 eslite_japan (中央区), 3月8日.
24. 森元斎, 石山友美 (2023). 眠っていた8ミリフィルム上映します『シネマ・フューチャーズ』特別上映会トーク, 秋田市文化創造館, 3月5日.
25. 森元斎 (2023). もう革命しかないもんね 長崎トーク, わかば堂 (長崎市), 2月28日.
26. 平井玄, 栗原康, 森元斎 (2023). 「放射能バカヤロー! 黒色汚染土鼎談」鼎談, 素人の乱12号店 (杉並区), 2月22日.
27. 武田宙也 (2023). フーコーを読む―初期の代表作『狂気の歴史』を中心に, NHKカルチャー (オンライン講座), 1月30日, 2月27日, 3月27日. 招待講演
28. 池野絢子 (2023). 変身の系譜―現代芸術にみる人間と動物のあいだ, シンポジウム「どこまでが動物なのか? : 人文学から考える」ヒトと動物の関係学会第29回学術大会, 東洋大学白山キャンパス, 3月11日.
29. 南谷奉良 (2023). 機械のような私と私のような機械―文学研究から考える生成AI・ロボット・人間の〈新しい握手〉について, 名古屋大学人文学研究科附属人文知共創センター設立記念シンポジウム〈けさひらく人文知〉, 名古屋大学, 3月26日. 招待講演
30. 南谷奉良 (2023). 第3次 AI ブームとカズオ・イシグロ『クララとお日さま』―人間・ロボットの脆弱性と代替可能性について, 第一回『終わらない読書会―22世紀の人文学に向けて』共催「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業学術知共創プログラム「人間・社

- 会・自然の来歴と未来―「人新世」における人間性の根本を問う」オンライン (Zoom), 2月24日.
31. 山本哲也 (2022). 事例で学ぶ論文投稿と査読対応のABC, 日本健康心理学会第35回大会, 日本健康心理学会機関誌編集委企画シンポジウム「論文投稿と審査過程における留意点―日本健康心理学会における論文投稿に関する情報共有と活性化を目指して―」, 東北学院大学, 11月19日-20日.
 32. 山本哲也, 吉本潤一郎 (2022). 認知行動療法における機械学習アプローチ, 日本認知・行動療法学会第48回大会 ワークショップ(WS7), シーガイアコンベンションセンター, 9月30日-10月2日. 招待講演
 33. 山本哲也 (2022). よりよく生きるための人工知能技術と情報通信技術の活用, 第6回行動科学セミナー, 国立がん研究センターがん対策研究所, 10月7日. 招待講演
 34. 山本哲也 (2022). 情報通信技術を活用した臨床心理学的アプローチの実際, 一般社団法人 公認心理師の会 2022年度年次総会, 9月24日-25日. 招待講演
 35. 山本哲也 (2022). 人工知能技術と情報通信技術を活用した認知・感情・創造性の拡張, 日本心理学会第86回大会, 大会公募シンポジウム「情報科学とロボット工学が拓く発達・知覚・臨床心理学の新たな学術領域」, 日本大学文理学部, 9月8日-11日.
 36. 山本哲也 (2022). 成人の発達障害の理解と対応, 精神科臨床薬学研究会(PCP)ブロック講演会, 8月21日. 招待講演
 37. 中村靖子(2022). 「人間・社会・自然の来歴と未来: 「人新世」における人間性の根本を問う」研究活動報告, 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業シンポジウム「未来社会を見据えた 人文学・社会科学分野における 学術知共創の課題について」, オンライン開催, 12月15日. 招待講演
 38. 中村靖子(2022). パネルディスカッション「未来社会を見据えた 人文学・社会科学分野における 学術知共創の課題について」, オンライン開催, 12月15日. 招待講演
 39. 大平徹 (2022). 遅れランダムウォークから遅れフォッカー・プランク方程式へ, 日本応用数理学会2022年度年会, 北海道大学, 9月8日-10日.
 40. 大平健太(2022). 共鳴振動ダイナミクスを示す遅れ微分方程式, 京都大学数理解析研究所(RIMS)研究集会, 「時間遅れ系と数理科学: 理論と応用の新たな展開に向けて」(代表: 西口純矢), 11月16日-18日.
 41. 岩崎陽一 (2022). ローゼンワイン著『怒りの人類史』を読む―インド哲学の観点から, 感情史ワークショップ, オンライン, 6月11日. 招待講演.
 42. 岩崎陽一 (2022). 認識論的世界と倫理的世界における衆生(われわれ), 日本佛教学会, 佛教大学, 10月1日, 招待講演.
 43. ハイドルン・ホルツハイント (映画作家・アーティスト), 森元斎 (2022). 「こんな今だから。(アサクサエンターテイメント2022「知らないことの政治学」)」対談, ASAKUSA (台東区), 12月18日
 44. 森元斎 (2022). 生きるためのアナキズム入門, シブヤ大学 (渋谷区), 12月17日.
 45. 森元斎 (2022). 水のゾミア: 森崎和江の民俗学, 森崎和江追悼記念講演, 西南学院大学, 9月10日.
 46. 森元斎 (2022). 学会コメンテーター: 過程哲学と現代のメディア研究, 日本情報学会, 東北大

学, 9月3日.

47. 森元斎,栗原康,五井健太郎 (2022).「アナキズム大放談!!!」鼎談, 誠品生活日本橋 eslite_japan (中央区), 7月5日.
48. 森元斎, 荒内佑 (2022).「もう革命しかないもんね」対談, 国立地球屋 (国立市), 7月3日.
49. 南谷奉良 (2022). クララに出来ることと出来ないこと—AIロボット小説Klara and the Sun (2021)の語りで学習される〈特別な言葉〉, 京大英文学会年次学会, 京都大学, 11月12日.
50. 和泉悠 (2022). スタルネイカーの会話分析から表現の自由へ, 日本哲学会第81回大会, ワークショップ「新しい言語哲学の可能性:応用言語哲学と概念工学」, 九州大学／オンライン開催, 5月22日.
51. 和泉悠 (2022). どうして悪口は面白いのか, 応用哲学会第14回年次研究大会, オンライン開催, 5月28日.
52. 和泉悠 (2022). 悪口と尊厳, 2022年度中部哲学会シンポジウム, 愛知学院大学, 9月24日.
53. 和泉悠 (2022). 情報化社会における攻撃的言語使用, 2022年度南山大学・豊田工業大学連携講演会, 豊田工業大学, 12月4日.
54. 武田宙也 (2022). コレクティヴな主体性をめぐって, 第73回美学会全国大会シンポジウム, 京都工芸繊維大学, 10月15日. 招待講演
55. 大平英樹 (2022). 内受容感覚と意思決定の関連とそれに伴うフィーリング, 生理学研究所社会認知科学研究会. 招待講演
56. 大平英樹 (2022). 自律神経と意思決定, 第75回日本自律神経学会総会, The Mark Grand Hotel (旧ラフレさいたま), 10月27日-28日.
57. 坂口菊恵 (2022). ポストAI時代に教育はどう変わるか,大学改革支援・学位授与機構 研究開発部研究会 (オンライン), 5月17日.

○本事業で主催したシンポジウム等 (計2件) うち国際研究集会 計0件

1. 『予測と創発—理知と感情の人文科学』刊行記念シンポジウム, 名古屋大学東山キャンパス文系総合館カンファレンスホール, 2023年3月29日.
2. 名古屋大学人文科学研究科附属人文知共創センター設立記念シンポジウム, 名古屋大学東山キャンパス文系総合館カンファレンスホール, 2023年3月29日.

○ホームページ

<https://a3hsn.org/>

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 令和4年度 委託業務実績報告書

プログラム名：学術知共創プログラム

研究テーマ名：人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う

実施機関：国立大学法人京都大学

1. 業務の実施日程

研究項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
④言語獲得と主体化プロセス (全期間を通して：資料収集、実験準備・実施、論文執筆)					キック・オフ・ミーティング	班別会議		人文知共創センター設立 理論班拡張会議	班別会議 「ロボットと感情」ワークショップ		読書会 班別会議	センター設立記念シンポジウム 論集刊行記念シンポジウム 全体研究集会 学会シンポジウム
⑤生政治とアート (全期間を通して：理論研究、実験研究、芸術研究)					班別会議						公開セミナー	

2. 業務実績の説明

①言語獲得と主体化プロセス

各班員の研究の基礎準備として、テキストマイニング用のファイル作成と共有、資料収集、実験準備・実施、論文執筆、学会発表を行った。また年3回の班別会議（9/22, 12/8, 3/17）を行うなかで、年度末のシンポジウムの打合せに加え、「脆弱性」／「痛み」／「言語獲得」の概念について班員間での共通理解を得るために、文学と発達心理学の専門書を対象テキストとして討議を行った。また超班型特別企画として、「ロボットと感情」ワークショップ（@大阪大学基礎工学研究科）を12/2に開催し、知神経科学や心理学、複雑系科学、科学哲学史の観点からディスカッションを行った。年度末には、グループリーダーが人間とロボットの知能／言語獲得とも関連する生成AIの問題系を導入し、センター設立記念シンポジウム（@名古屋大学）で報告した他、専門知を一般社会に還元し、若手研究者を育成するという研究計画にもとづき、AIを活用した公開イベント「終わらない読書会—22世紀の人文学に向けて」を2回実施した（2/24, 4/26）。ロボットと人間の共生に加えて、「生成AI」という喫緊の社会問題・知的課題の登場が新しい契機となり、各班員活動を互いに意義深く関連させる成果が見られた。

②生政治とアート

2022年8月7日にオンラインで第1回の班別会議を行った。これには代表の中村や政治学の田村（理論班）も加わり、今後の活動の方向性について議論した。

• 理論研究

フーコー以降の生政治理論を整理すると同時に本研究の枠組みとして参照可能な生政治理論の新たな展開を探った。具体的には、あくまで人間の統治を念頭に置いたフーコー型の生政治

論に対して、人間以外のものの統治まで射程に収めたトーマス・レムケの議論（Thomas Lemke, *The Government of Things: Foucault and the New Materialisms*, 2021）などを検討した。

- 実験研究

生政治概念に基づいた実験研究を進めた。具体的には、PCを介した同時実験、唾液検体の採取・冷凍保存などを行い、データを収集した。唾液検体の生理物質の解析をしてくれる学内外の研究協力者とともにデータを分析した。また、内受容感覚知覚と、自己や他者の感情推定の細やかさとの関連について、経験サンプリング法とテキストマイニングで検討した。

- 芸術研究

ポストヒューマンアートをテーマする海外の国際芸術祭（ヴェネツィア・ビエンナーレ、ドクメンタ15）を調査したほか、「人新世とアート」について考えるセミナーを開催し（2023年2月18日、名古屋大学）議論を深めた。「人新世とアート」というテーマでは一般的に比較的最近の現代アートが俎上に載せられることが多いが、議論を通じてこのテーマの歴史的な射程の広さとその重要性が明らかとなった。